４　キャリア教育推進の二本柱

◆キャリア教育推進の重点項目として、これまでの『地域ぐるみ教育』の資産を生かし、『体験活動の再プランニング』と『キャリア教育視点での授業改善』を二本柱に設定し、重点的に取組みました。

① 体験活動の再プランニング

◆今まで取組んできた体験活動をキャリア教育視点で見直し、目的（その体験を通して、どのような能力を育てたいのか）を明確にし、事前事後の指導を充実させて、子どもたちのキャリア発達*を促していく取組みを『体験活動の再プランニング』として位置付けました。

（*キャリア発達･･･社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程）

須崎には体験活動の積み重ねがある。それを生かして

◆須崎市では各校で、様々な体験活動を行っていますので（次項『推進校の実践』に具体例を載せています）、キャリア教育として新たな活動を立ち上げるのではなく、これまでの取組みを生かし、経年による行事消化型の発想を切り替えて、「この力をつけたいからこの行事をする」という目的を教職員間で共有しながら、子どもたちが将来、社会人・職業人として自立するために必要な力を育てていきたいと考えています。

◆そのためにも､｢早くこの体験活動がやりたい｣｢自分の将来のためにこんな力をつけたい｣と子どもたちに思わせるような事前指導と、体験を振り返り、感じたことや身に付けたことを子どもたち自身が明確化・意識化するための事後指導を工夫していく必要があります。

－　－　－　－＜経年による行事消化型の例＞－　－　－　－

〇子どもたちに農業の素晴らしさを体験させたいと、指導の工夫をしながら『米作り体験』をスタート

～何年か経つと～　◇あー、また今年も田植えの時期が来たねぇ。去年の資料はどこ？いつやる？

〇田植えをするだけじゃなくて、実際に農業をされている方に話をしてもらおう！と、見直しをする

～何年か経つと～　◇田植えの時期だから、今年もあのおじさんに連絡しておいてー、になりがち。

わくわくチャレンジ in すさきの実施

◆須崎市では中学生の職業体験として､平成 11 年度から『わくわくチャレンジ in すさき（わくチャレ)』実施し、翌年から小学校も、職業体験や農業体験、宿泊通学体験など､学校や地域の実情に合わせた『わくチャレ』を実施しています。

◆中学生のわくチャレは、平成２３年度までは５日間、現在は３日間の日程で、浦ノ内中・南中・朝ヶ丘中・上分中の４校は７月に、須崎中は１１月に実施しています。

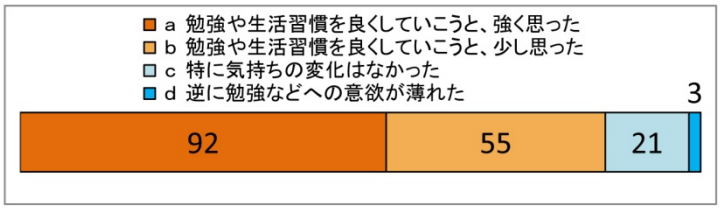
◆事前指導は、事業所への連絡の仕方や、仕事のマナーなどの他に、キャリア教育副読本『みらいスイッチ（高知県教育委員会)』を使って、働くことや自分の将来について考えさせる授業を行っています。

◆事後指導は、事業所へのお礼状の作成や、実習中に記録した『わくチャレノート』をもとに、体験内容を掲示物にまとめたり、発表会を行なったりしています。発表会は、下級生や全校への発表の他に、保護者や事業所をお招きしたり、小中一貫校では小学生に発表したりするなど、各校で工夫されています。

H26わくチャレ 実施後アンケート 中学校5校の集計より

A【生徒】職場体験をした後の、あなたの気持ちに近いものはどれですか。

	計
a 勉強や生活習慣を良くしていこうと、強く思った	92
b 勉強や生活習慣を良くしていこうと、少し思った	55
c 特に気持ちの変化はなかった	21
d 逆に勉強などへの意欲が薄れた	3

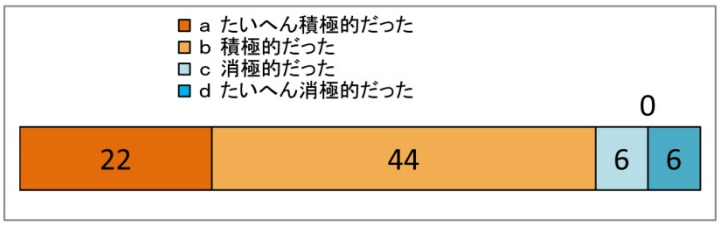


B【保護者】「わくチャレ」をお子さんが体験して、良かったと思いますか。

	計
a とても良かった	60
b 良かった	64
c あまり良くなかった	2
d 良くなかった	1

C【事業所】生徒たちの取り組みに対する姿勢はどうでしたか？

	計
a たいへん積極的だった	22
b 積極的だった	44
c 消極的だった	6
d たいへん消極的だった	0
e 積極的な生徒と、消極的な生徒がいた	6



◆わくチャレも今年度で１７回目となり、アンケート結果からも保護者や事業所に肯定的に受け止められていることが分かります。一昨年度にアンケート項目を見直し、生徒に実施後の気持ちを問う項目を加えましたが、昨年度は台風の接近で２日間しか実施できなかったにもかかわらず、「勉強や生活習慣を良くしていこう」と多くの生徒の気持ちが変化しています。

◆わずかな期間ですが、社会に出て働くことを体験することによって視野が広がり、新たな視点で自分を見つめ直すことができたからだと思います。だだ、この気持ちは、個人が感じたままで終わらせるとすぐに薄れてきますので、感じたことや今からできること等を文章に書き表す（さらに発表する）ことで、感じたことが自分の意思へと具体化します。体験活動ではこのような事後指導によって「これから～していきたい」と考えさせることが大切だと思います。

「わくチャレ」はどのように経験されたのか？

私↓公への広がり

生　徒

活動そのものから生じた**感情**
・興味、関心
・緊張、高揚、不安、悔しさ、使命感、責任感
・充実感、達成感
・疲れ、嫌悪感、がっかり

自己についての振り返り
・自己変容の難しさの実感
・自らの適性についての気づき
・自らの学校生活の送り方の再考
・**未知の経験**ができた、知識・技術を習得できた
・他校生と交流できた

将来についての思考
・将来への展望が持てた
・自信喪失、不安増大

家族についての振り返り
・きょうだいへの眼差しの変容
・親の子どもに対する想いの認識

社会についての振り返り
・社会人の凄さ、優しさを知った
・社会人のマナー、他者配慮、コミュニケーションを知った
・仕事の実際（裏側・仕組み・楽しさ・苦労）を知った
・働く、協力、主体性の意味や意義を知った
・人々の日常生活の望ましいあり方に思いが及んだ

事業所

伝えたいこと
・仕事の大変さ
・時間を考えた行動
・責任を持っての行動
・報告・連絡・相談の重要性
・会社、社会の仕組み
・働く、お金の意味や意義

わくチャレの意義
・進路選択の材料
・仕事や社会の現実を実感
・学期初めが効果高では？
・**長期が望ましい（慣れた先にあるもの）**
・**主客逆転**

学校評価
・挨拶指導をもっとしてほしい

地域でのコミュニケーション
・町の人に「わくチャレね」と声をかけられる

物理的問題
・事業所の繁閑との関連
・季節との関連

保護者

子ども自身の変容
・仕事の大変さを理解した
・情報共有の重要性の気づき
・コミュニケーションやお金の大切さの気づき
・「していただく」という考え
・多様な仕事への興味関心
・将来を思考するように
・目標を発見できた
・一歩踏み出す力がついた
・主体性が出てきた
・挨拶できるようになった
・責任感が生まれた
・自信がついた
・忍耐力がついた
・やる気がアップした

家庭内言動の変容
・家事手伝いをするように
・**コミュニケーションの増大**
・ペットへの眼差し変容

物理的問題
・送迎の困難
・保護者への情報伝達
・須崎の産業に限定しないで
・**事業所への感謝**

高知大学教育学部附属教育実践総合センターの横山卓先生に、『わくチャレ実施後アンケート』の自由記述から言葉を抽出し、分類していただきました。生徒たちの意識が体験を通して、個人（私）的な感情から社会（公）へと視野が広がっていることが分かります。

わくチャレ・生徒の感想より

★学べることも多かったし、楽しめることもありました。大変な作業もあったけど頑張れた。これを毎日やるってすごいと思った。受け入れてくれた事業所の人に、忙しい中ありがとうございましたと言いたいです。

★この体験を通して仕事の厳しさや大切さ、責任感などをしっかりと学ぶことができました。また、仕事をする上でコミュニケーションがどれだけ大切なものなのかも改めて学べたと思います。この体験を大人になってからも活かしたいです。

★任された仕事はしっかりすること、仕事内容を忘れないことなど、今まで軽く考えていたことが仕事では確実にしないと大変なことになることがわかった。これからの生活で気をつけていきたい。

★わくチャレでいろいろ学べて、3 日前の自分と今の自分が違って、今の自分が成長したと思います。

★私は最初自分で行動することが苦手なので、どうしようと心配していたが、1 日目に教えてもらったことを 3 日目には何も言われないで自分から仕事をすることができていた。このわくチャレというのは本当にいいと思いました。自分が自信がないことが、本当はできると証明してくれる行事です。

わくチャレ・事業所の感想より

★当初は、売り場やストックでの挨拶も恥ずかしそうで声も小さかったが、しっかり挨拶ができるようになりました。仕事のスピードも日を追うごとに早くなって、しっかりこなせるようになりました。

★仕事をする上で、注意すると少し態度の良くない生徒がいたが、2日目には、素直な態度であったし、背筋も伸びて、少し自信がついたように思った。

★体験実習を通して、社会について学ぶという点で、生徒にとっては大変良い経験になる事業だと思い

ます。まだ中学生ですので、「働く」という意識や「ビジネスマナー」について、今はまだ明確な理解は難しいかと思いますが、こうした経験をぜひ将来に活かしていって欲しいです。

★受け入れる側も生徒さんへの対応などを職員で話し合うことでいい勉強になっている。

★仕事を3日間体験することは、学校で教科を学ぶこと以上に多くのことを吸収できるのではないかと思います。意義ある取り組みだと思います。

わくチャレ・保護者の感想より

★仕事で頼まれたことを楽しそうにこなしている話を聞いて、普段の生活と違う環境で緊張しながらも充実していたのだろうなと思いました。

★希望の職場ではなかったが、一人っ子の本人には良い体験であり、成長した様に思う。

★働いてお金を稼ぐという事がどれだけ大変かということが身をもって少しではありますが、分かってくれました。

★私としては、体験学習はそこまで良いとは思っていないのですが、本人に聞いたら「やって良かったよ」と大きい声ではっきりと言っていたので、この子にはプラスにはたらいてくれたのだと理解しました。

★めったにない貴重な体験ができて、子どもにとってもプラスになることはもちろん地元の方々に子どもたちを知って身近に感じ、親しみをもってもらうということもとても大事なことだと思います。受け入れる側も大変でしょうが、ぜひ続けてほしいと思います。

★体験させていただいたことを自分からすすんでやってみようと、家でも手伝いをしてくれました。職場の方にずいぶん良くしていただいて、3日間頑張れたと思います。貴重な体験で本人も自信がついたと感じました。

【保護者に質問】このような職場体験学習は、須崎の子どもたちに必要だと思いますか。

- a とても大切な学習だと思う（75人）
- b できればやった方がいいと思う（47人）
- c あまり必要ではないと思う（1人）
- d ３日間体験学習をするよりも,学校で勉強をさせた方がよい（1人）
- e 必要か、そうでないかは分からない（4人）

（H26）

体験活動を通して、将来の自分をイメージする

◆体験活動を通して視野を広げることの他に、自分の将来をイメージするための出会いの場として、体験活動を位置づけています。子どもたちが将来の自分を考えるとき、具体的なイメージをもつための出会いが必要で、地域の方との交流や、専門の講師を招いての学習会、ボランティア活動や販売体験活動などを通して、いろんな出会いの場をつくっています。

◆荒川区の諏訪台中学校では、キャリア教育の視点で、地元の小学校で合唱を披露しています。なぜ合唱がキャリア教育になるかというと、中学生には昔の自分を振り返る機会に、小学生にはこんな中学生になりたいという気持ちを育てる機会にと考えているからだそうです。

子どもたちが夢や目標をもつためには、
こんな上級生になりたい
こんな中学生や高校生になりたい
こんな大人になりたいなどの
具体的なイメージが必要

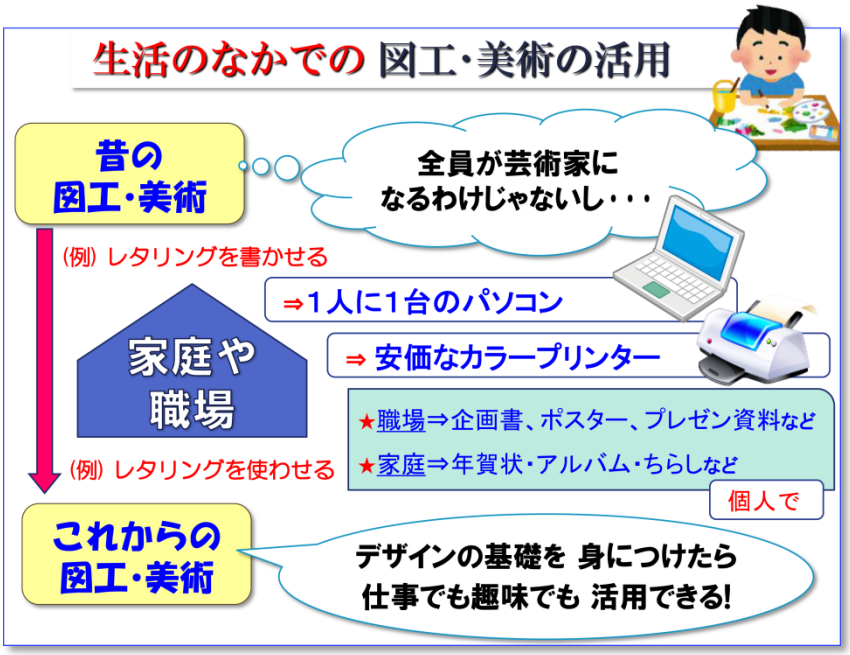
◆須崎市の小中学校では、保幼・小・中・地域が連携して地域ぐるみ教育を進めていますが、行事や体験活動にキャリア教育視点を取り入れて、心に残るよい出会いの場がたくさんつくられています。

② キャリア教育視点での授業改善

◆子どもたちの学習意欲を引き出すために、『何のために学んでいるのかが分かる 実生活と関連させた授業づくり』によって、**『実感をともなった理解』**へと学びの質の転換をはかることが必要だと考え、キャリア教育推進のもう一本の柱として、キャリア教育視点での授業改善を進めています。

実生活とリンクさせることで、実感をともなった理解へ

◆例えば､図工･美術の授業で考えてみたとき、昔はデザインの基礎を習っても、将来それを役立てることはあまりありませんでしたが、今では家庭や職場にパソコンやプリンターがあり、仕事で印刷物やプレゼン資料の作成を任されることも多くなり、デザインの知識が直接仕事に役立つようになってきています。



◆それを理解し、教科書にあるからやるという授業ではなく、将来仕事や生活の中で使えることを意識して授業をすることで、授業の構成が変わり、子どもの興味関心が高まってくると思います。

◆例として須崎の推進校で実践された中１美術『ピクトグラム』の授業を紹介します。ピクトグラムとは、非常口やトイレのマークになっているヒト型の表示（ヒト型に限らず、目的を簡単な図形で表したマークのこと）ですが、身近にたくさんのピクトグラムがあることから、ピクトグラムの学習と生徒たちの生活とを繋げることで、学習への興味関心がすごく高まりました。

◆さらに、**① 掲示して実際に使ってもらえるもの　②誰にでも分かるもの　③今までに作られてないもので、中学生でも考えやすいもの** を重点として、**『小学校１・２年の担任の先生が、授業で使えるピクトグラム』**というアイデアが、授業者の先生から出されました。

◆**ピクトグラムを知る⇒身近なピクトグラムを探す⇒ピクトグラムを作る練習をする⇒小学校の先生に、よく使う指示の言葉を聞き取りに行く⇒ピクトグラムを考える⇒制作する⇒評価し合う**

こうしてゴールが定まると、授業の流れも自然とできあがってきます。

『身近にあるもの』『実際に使えるもの』を授業に取り入れることで、**「絵を描かされる」**のではなく、**生徒たちが主体的に取組める授業**にすることができたと思います。

生徒たちが作ったピクトグラム

学ぶことで街が、秀逸なデザインのあふれる美術館になる！

◆今回の授業を受けた生徒たちは、ピクトグラムに興味津々！**街を歩いていても、ピクトグラムに目がとまり**、「これは分かりやすい！」とか「これはちょっと分かりにくい」「私ならこうする」などと考えているそうです。そんな街歩きができることは、とても楽しく素晴らしいことだと思います。
目的をもたずに習ったものは、ただの知識で終わってしまいますが、**目的意識をもって学んだことは知恵となり、一生の宝となる**ことでしょう。キャリア教育の視点を授業に入れていくことの良さは、そういうところにもあるのではないでしょうか。

教師の思いが入ることで、授業構成が変わる

◆推進校での中学３年生社会科授業研「戦後の日本」では、戦後の人々の暮らしを象徴する６枚の写真を提示し、印象に残る写真を選び、写真に写された状況を推測しながら、班で意見交換をし、意見をまとめて発表するという授業を見せていただきました。生徒たちは戦後を生きる人々に関心をもち、熱心に話し合っていました。

◆授業者から、『戦後の出来事を教えるだけでなく、戦後の苦難を乗り越え生き抜いた人々の姿から学び、中学３年生の生徒たちに、受験や卒業後の人生で困難なことがあっても乗り越えていってほしい』という思いを聞きました。
単に教科書の内容を理解させるだけでなく、そこに授業者の思いが入ることで授業構成が変わり、生徒の関心意欲を高めることに繋がっていく好例で、印象に残る授業でした。

学ぶこと、分かることは、子どもの世界が広がること

◆小学校の「３桁の数の足し算」の授業研では、買い物をイメージした展開をされていました。なぜ３桁の数の足し算を習うのでしょうか。教える側から考えると、１桁を教えて２桁を教えたから次は３桁という自然の流れですが、**習う児童側から考えると、買い物の計算ができるようになるなど、自分**

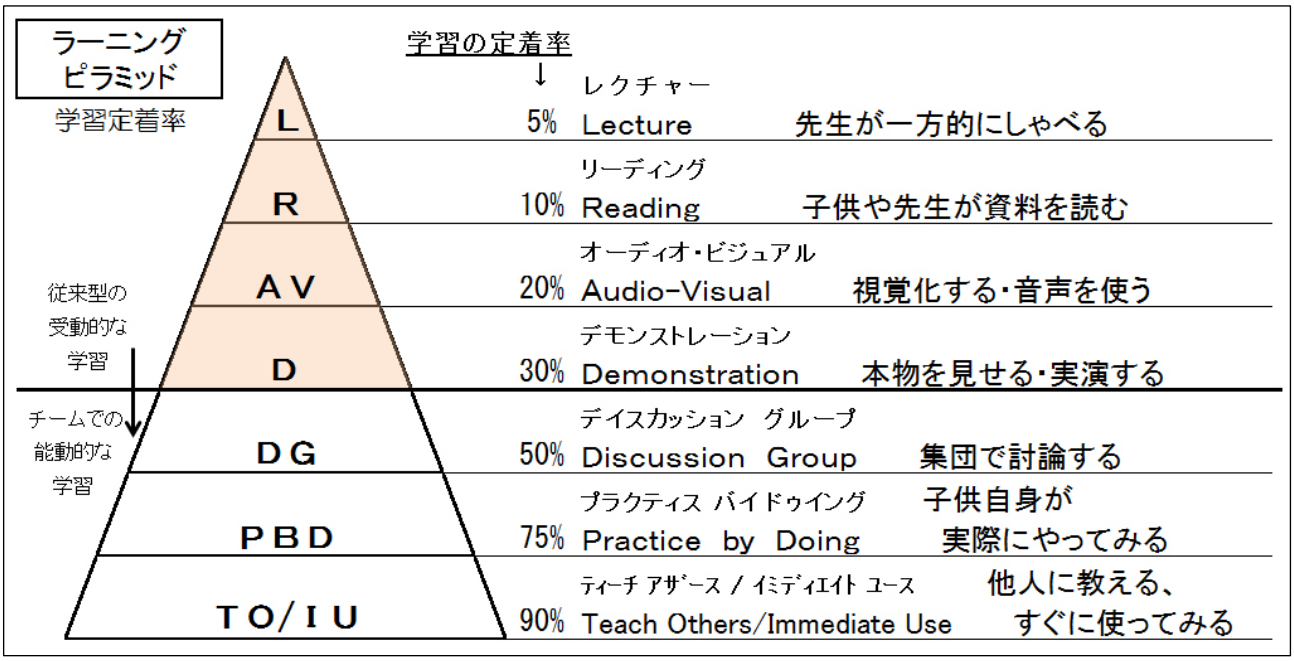
の世界が大きく広がることになります。子どもたちは、親と買い物に行ったときに値段を見るようになるかもしれません。計算する子もいるでしょう。そうやって自然と数字に親しむことはとても大切ですし、習ったことを使いたくなる授業が、子どもたちの学習意欲を高めていくことでしょう。

◆「これができるようになったら、子どもたちにどんな良いことがあるのか」と、子ども側から考えてみるのも授業改善のよいヒントになると思います。

やってみる・教える・使ってみることで学習が定着する

◆須崎市夏季教職員研修会で講師の園田雅春先生（大阪教育大学特任教授）に『ラーニングピラミッド』を教えていただきましたが、『実際にやってみる・他人に教える・すぐに使ってみる』ことを授業に取り入れることで、学習したことが定着するということです。

◆この中にも、キャリア教育視点で授業改善をしていくための良いヒントがあり、『習ったことを活用する授業』が子どもたちの意欲を高め、長く記憶に残ることになります。



学習定着率の各％は、確かな実証実験があったわけではなく、世界中に広まる中で付け加わっていったものですが、教育に関わるたくさんの人が自身の体験から感じていることと一致しており、能動的な学習を増やすことで、学習の定着率が上がることは間違いないようです。

使うことを前提にした授業

◆習ったことをすぐに授業で活用する授業でなくても、例えば、習ったことを家族に説明し、結果をレポートする授業なども考えられます。（内容によっては、下級生や小学生に教えに行くことも）

◆例えば『気象の学習』の最後に、家族に説明してくるという課題を与えたり、架空の天気図を作らせて、みんなの前でＴＶのお天気キャスターのように説明させたりと、習ったことを使えるようなミッションを用意することも面白いと思います。また、実際に天気図を説明してみると、地名など、他教科の知識が必要になることも分かってきます。

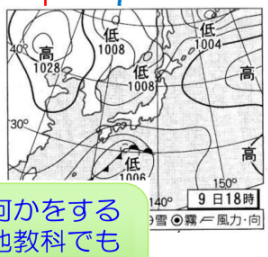
◆このようにミッションを設定し、クリアしていくことで、教科の目標に加えて、キャリア教育の基礎的・汎用的能力を育てることにも繋がってくると思います。

例えば具体的に…ミッションクリア型授業

中２理科・気象の学習

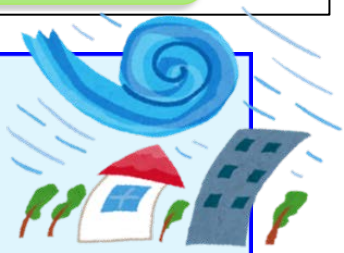
＜ミッション＞

- 新聞の天気図を見せながら、家族に天気について語る。
- 成功話、または失敗談をレポートする。



誰かに教えることなど、学習の後に何かをすることを前提に学習を進める方法は、他教科でもいろんなやり方ができると思います。

＜ミッションクリアを目指すことで育まれる能力など＞



- ＊気象に関する知識・理解、科学的な見方や考え方
  ⇒教えることでさらに確かなものに
- ＊習った内容と、実際の事象とを結びつけ、活用する力
- ＊分からないことを、自ら進んで調べたり、誰かに聞いたりする力
- ＊相手に伝えるためのコミュニケーションスキル
- ＊うまく伝えられなくても、もう一度学び直すなどの、前向きに考える力
- ＊学ぶことの意義や、学ぶことと自分の将来とのつながりを考えたりする力 など

「将来、困るよ！」では、
内発的動機は高まらない

◆「英語のいる仕事には就かないし、日本で暮らすから、外国語は勉強しなくてもいい」「昔の人がやったことなんて知らなくても生きていけるし、歴史なんて勉強しなくてもいい」などと考えている子どもたちには、『学習していること』と『今』とを繋いであげることが必要になります。

◆右図の授業のように、英語を習うことで外国の人と手紙のやり取りができる！外国の食材で調理ができる！そんな体験から、もっと学びたいという意欲が生まれてくると思います。

JICAと連携した英語の授業

中学校
外国語

～ウガンダの生徒に、英語で手紙を書こう～

具体的に英語を使う場面を設定することで、
学習したことを使ったり、教え合ったりできる。

中１の時に出した手紙の返信を読んでいるところ。その返信をこの授業で書いていきます。

中学校 外国語

☆ハワイから取り寄せたタロイモ粉の英文レシピを訳し、英語で会話しながらパンケーキを焼く授業

キャリア教育視点を入れた学習指導案の共通書式

◆授業にキャリア教育視点をとり入れる方法についてはいろんなアプローチがあり、地域の特色や先生方のアイデアを生かした授業を各校で研究していますが、お互いに学び合いができるように、学習指導案ついては須崎市で共通した書式を作成しました。（次ページに掲載）

◆キャリア教育視点を入れた授業に初めて取組むときに、指導案も全く新しい書式にするとハードルが高くなることと、書き慣れた書式を利用する方が授業者も参観者も分かりやすいことなどから、高知県教育委員会が作成している書式を元にして共通書式を作成しました。

◆その指導案ですが、須崎市教育研究所のホームページ内に、須崎のキャリア教育のページを開設し、各推進校が昨年度作成した指導案を載せており、ＰＤＦ形式でダウンロードもできるようにしています。

教科の目標と、キャリア教育視点でつけたい力

H26年４月16日、韓国の大型旅客船セウォル号が、転覆・沈没した。修学旅行中の高校生等、乗客は船内で待機させられ、多くの犠牲者が出た

◆指導案を作成していく過程で、教科の目標とキャリア教育でつけたい力と、どちらを優先するかということも問われました。基本的には教科の目標が優先されると思いますが、その教科や単元を教えることの根本に、キャリア教育の視点があることを、韓国セウォル号事件を例にして考えてみました。

◆水泳の授業でクロールや平泳ぎができるようにすることは大切な目標ですが、泳ぐことで水に親しみ、泳げるようになることで水泳が好きになり、もしものときには自分の命を守れるようにするということも、水泳の大切な視点だと思います。水泳を例にあげましたが、どの授業でも教科の目標を大切にしながら、『何のために教えるのか』というキャリア教育視点をもって、教え方や授業構成を見直していくことが必要だと思います。

・なぜ救命胴着を着て、海に飛び込まなかったのか
・なぜ海洋警察の対応が迅速でなかったのか
・韓国の小中学校の99%にプールがなく、水泳の授業もない 怖くて海に飛び込めない
・海洋警察官の32%が全く泳げず、半数が500mも泳げない

・日本では、1955年の紫雲丸沈没事故後、国会で議論となり、命を守る水泳の教育を学校でしていくこととなる。

★ 何のために水泳を習うのか

学校体育の目標	◆体力・身体能力向上 ◆知識の習得・競技力向上 ◆生涯体育の推進 など

海洋国家として、水難事故防止の意味も

水を怖がらない ➡ 命を守る

日本では水泳の授業があることを当たり前に思っていますが、全国の学校にプールを造り、それを毎年維持していくためには莫大な費用がかかっています。南小中学校など、キャリア教育視点で防災教育を進めている学校では、命を守るという視点を体育の授業にも取り入れています。